光原 百合（みつはら ゆり）　尾道に生まれ育つ。大阪大学文学部卒業、同大学院文学研究科修了。
現在、尾道市立大学芸術文化学部教授をつとめるとともに、作家として推理小説、ファンタジーなどを執筆する。
近年は物語（特に怪談）による地域の活性化に興味を持ち、尾道を舞台とした小説を執筆するとともに、関連企画をプロデュースしている。

教養講座　2016.10.5

［研究要旨］

尾道てのひら怪談について

尾道市立大学芸術文化学部日本文学科教授
光原 百合

1．怪談の新たな役割

２０１６年９月２４日付の河北新報連載コラム「とうほく本の散歩道」に、次のような一節がある。「東日本大震災を境に、文芸としての怪談が担う役割は大きく変わったと思う。単なる怖い話、不気味な話と言う既存イメージから、あの世とこの世をつなぐ、故人と生者との対話との性格が色濃くなった」

確かに、怪談は従来、「単なる怖い話」、さらには「怖さを娯楽として扱う不謹慎なもの」と思われがちであった。しかし東日本大震災の後、東北地方では、あの震災によって命を失った人にまつわる多くの実話怪談が生まれ、それが単なる怖い話ではなく、まして不謹慎な娯楽としてではなく、亡き人との再会をはたしたどこか心温まるものとしてとらえられるという現象が起こった。これは、柳田國男の『遠野物語』を生んだことからもわかるように東北という土地が、あの世とこの世を地続きの存在としてとらえる文化背景を持っていたことも関係してい

るのかもしれない。

2．「ふるさと怪談」について

そして怪談は、亡き「人」との再会を描くだけではなく、失われてしまった、あるいは失われつつある懐かしい風景を物語の中に残すという役割をも果たす。たとえば怪談作家の黒木あるじ氏は、「怪談の『力』」という論考において次のように述べる。

「もう帰っては来ない「あの日以前」を皆の記憶に留めるために、私は怪談を蒐集し続ける。語り、聞き、綴られることで、「ふるさと」はかつての姿を人々の記憶に残し、生き続けていくはずだ。怪談には、その「力」があるはずだ。」

（『渚にて　あの日からの〈みちのく怪談〉』（２０１６年、荒蝦夷刊）に収録）

実は東北では、東日本大震災の前年である２０１０年に（『遠野物語』刊行１００周年にあたる）、出版社の荒蝦夷と文芸評論家の東雅夫氏らが中心となり、「みちのく怪談プロジェクト」という怪談文芸復興の企画が始まっていた。大震災によって中断の危機にさらされた同プロジェクトは、上に書いたような怪談の力、亡き人や懐かしい風景を記憶に残すという怪談の力を信じる関係者一同の努力によって継続した。

それに共鳴した全国の怪談ファンたちが、東北だけでなく、それぞれの地域でも怪談を通してふるさとの姿を残していきたいという動きが起こり、「ふるさと怪談」という言葉が生まれた。そこから現在に至るまで「ふるさと怪談トークライブ」というイベントが各地で行われている。これは、それぞれの地域の怪談を語り合うことを中心にしたイベントで、東日本大震災復興支援のチャリティも兼ねている。２０１６年には尾道においてもふるさと怪談トークライブが開催された。

3．「てのひら怪談」について

「てのひら怪談」とは、８００字以内で綴られた掌編怪談の呼称である。もとは、２００３年から開催されていたビーケーワン怪談大賞コンテスト（ネット書店ビーケーワン主催）の応募字数制限が８００字であったことに始まる。この字数は、コンテストの中心人物であった東雅夫氏が、８００字という字数はネットの画面で見たときにちょうど見やすい分量であること、また８００字あれば魅力的な怪談は書けると判断したことから決まったとご本人からうかがっている。実際、この賞には非常にレベルの高い怪談作品が寄せられた。それらの作品がのちにポプラ社から刊行された際、書名として使うために「てのひら怪談」という言葉が考案され、

８００字以内の掌編怪談を表す言葉として知られるようになった。

ポプラ社からのてのひら怪談シリーズの刊行は２０１３年をもって一応終了しているが、その後、てのひら怪談を愛する有志が、ふるさと怪談とてのひら怪談の魅力を合わせ、関係者の間では「ご当地てのひら怪談」と呼ばれている企画をあちこちで立ち上げた。特定の地域と結びついた掌編怪談の公募コンテストである。これまでに西荻、深川、京田辺などの地域で開催されており、大阪では２０１５年、２０１６年と連続で開催されて、主宰者である怪談作家の田辺青蛙氏は今後も継続の意向であると語っている。

それらの流れを受け、尾道という土地にも怪談が似合うと筆者は考えた。尾道は風光明媚で歴史も古く、人々の町への愛着も強い。また旧市街には寺社が多く、この世とあの世が仲良く隣接しているような雰囲気を残している。尾道を舞台とした魅力的な怪談が新たに生まれれば、尾道の新たな魅力にもつながることだろう。

このようないきさつで、２０１６年１１月から２０１７年２月までを応募期間に設定して「尾道てのひら怪談コンテスト」を開催した。教養講座開催の時点では募集前であったが、締切までに２３８編の応募を受け付け、本稿を執筆の段階で審査中である。どのような作品が寄せられたか、大いに期待されるところである。連動企画として、尾道市立大学美術学科学生有志がすべての応募作品にイメージイラストを描いて、尾道市立中央図書館にて展示を行った。

すべては今回の結果次第であるが、可能であれば「尾道てのひら怪談」も大阪のように、今後とも継続させていきたい。